

リュクルゴス再考 (研究ノート)

新村 祐一郎

一

一九六九年に刊行された A. J. Toynbee の著書 "Some Problems of Greek History" の第三部 The Rise and Decline of Sparta. の一部はすでに紹介したが、第三部第三章の Annex. V で「リュクルゴスは人か神か」(Lycurgus, Man or God?) を扱っている。この問題は久しい以前から多くの論者によって取りあげられているところであるが、これは、要するに、リュクルゴスが歴史的存在か否か、また、リュクルゴスは実在するか否実的存在かということである。筆者は十数年以前にリュクルゴスとその立法伝説について、不十分ながらも、考察を行なったことがあるが、その際、リュクルゴスの否実在を主張し、彼を英雄 (heros) — 建国英雄、護国英雄 — と考えた。この見方は現在でも、基本的には、変っていないが、ここではその後に表示された諸家の見解をも参考にしつつ、もう一度、リュクルゴスについての筆者の考え方をまとめておきたい。

二

プルタルコス「リュクルゴス伝」の冒頭の記事を引用するまでもなく、リュクルゴスの生涯とその事跡についてさまざまな伝承があって、一致するところがない。しかし、ヘロドトス以後の古代の著述家の中で、リュクルゴスの実在を積極的に否定するものはなく、スパルタ人のしたがるべき法 (国制) を制定した実在の人物とされていたようである。

リュクルゴスの名をはじめて文献に残したのは、おそらく、ヘロドトス (I. 65) である。しかし、プルタルコス (Lyk. 1) によると、ヘロド

トスより年長であるシモニデス (c. 556-468 B.C.) がリュクルゴスとスパルタの王統との関係を云々している。一方、ヘロドトスと同時代のヘラニコスは、エフォロスによると、全くリュクルゴスに言及してゐない (Strab. III, 5, C 366) 、「ピンダロス (c. 518-438 B.C.) の詩の中にも、その名は現れていない。また、ツキユディデスもリュクルゴスの名を記していない。リュクルゴスの伝記に類するものを最初に書いたのはエフォロスであろうと推定されるが、クセノフォン (Lac. Pol. I, 2ff.) もリュクルゴスの立法事業に触れている。時代を経るにしたがつて、リュクルゴスの事業として、さまざまなものが結びつけられ、プルタルコス「伝記」に示す如きものになって行く。

ところで、ここで注目しなければならないのは、以上にあげた前五乃至四世紀の諸著述家がいずれもスパルタの国制の由来について言及していることである。ヘロドトス (I, 65) は、リュクルゴスがデルフォイの神託によつて神格化され、同時にその国制を授けられた、という伝えと、リュクルゴスがアギス家の年若い王レオボテス (Leobotes) の後見役であったとき、クレタからその国制をもたらした、というスパルタ人自身の持つていた伝承とを併記している<sup>(5)</sup> とくに、後者の伝承では、彼は生前に神格化されておらず、その死後 Hieron が建立された、とするところには注意しなければならない。すなわち、リュクルゴスがデルフォイで神格化されてのちに国制をもたらしたのか、あるいは、単なる王の後見役という人間として他国から国制をもたらしたのか、ヘロドトスは断定をひかえている。また、リュクルゴスの名を記していないヘラニコスはエウリュステネス (Eurysthene) とプロクレス (Prokles) とが国制を整備した、といっているが、この二人は、伝承上、スパルタの二王家の祖となった双生児の兄弟で、ラコニアに侵入したドリス人を指導した、といわれる人物である。なお、ヘラニコスの時代には、すでにこの二人を祖とするスパルタの王統がほぼ形をととのえられていたことは、同時代のヘロドトスが両王家の王名を逐一記していることから明らかである。

一方、ピンダロス (Pyth. I, 64) はアイギミオス (Aigimios) がラコニアのドリス人のしたかうべき法規を制定した、という。このアイギミオスは、伝承上、ドリスの祖であるドロス (Doros) の子で、ドリス人の三部族のうち Dymanes と Pamphyloi はアイギミオスの二人の子をそれぞれ名祖とする、といわれている<sup>(6)</sup> したがって、これはヘラニコス以上に国制の起源を古い時代に求めたもの、といふことができる。

ツキユディデス (I, 18) は今次戦争 (ペロポネソス戦争) の終結まで四百有余年にわたつて、スパルタは同じ国制を保つて来た、と述べている。しかし、彼はその国制の由来にまつわる人名をあげていない。だが、ここには、はっきりとした年数が示されており、その点が他と異なる。

る。ツキユディデスのいうところの国制の起源の年代は前九世紀末ということになる。<sup>(7)</sup>

クセノフォン (Jac. Pol. X. 8) は国制をリュクルゴスに帰しているが、その時代をヘラクレイダイの時代<sup>(8)</sup>としている。スパルタの二王統は、ともに、ヘラクレイダイを自称しているから、この表現は曖昧であるが、一般には、これはドリス人のラコニアに侵入した初期の時代を指すもの、とされている。したがって、時期的にはヘラニコスと大差はないが、国制をリュクルゴスに帰している点を考え合わせると、ヘラニコスとヘロドトス両者の見解を折衷する如き感がある。また、エフォロスもヘラニコスの見解を紹介する際に、彼自身としては、リュクルゴスを国制の制定者とすべきことを示している (Strab. III. 5, C366)。

以上のように、前六乃至五世紀の著述家は、いずれも、国制に言及しながら、しかもその間に一致するところがきわめて少ない。しかしながら、前五世紀頃からは、すでに、リュクルゴスがスパルタの立法者である、という考えが次第に普及してきたようである。また、この時期には、何らかの理由で、国制の起源や由来が熱心に探求されていたものと考えられる。おそらく、前五五〇年頃に完成したスパルタ独特な国家体制がギリシア各地に知られ、また宣伝されたため、スパルタ以外の地でも、その独特な体制の成立過程に関心が持たれ、それが国制の由来をさまざまに時代のさまざまな人物に帰する諸見解を生み出す起因になった、と思われる。

スパルタ人自身の見解として、ヘロドトスの伝えるところでは、先にも述べたように、クレタ島からその国制がもたらされた、というのが一般的であったようだ。この説はプルタルコスにまで取り入れられているが、プルタルコスでは、これとデルフォイ起源説とが結びつけられた形になっている (Lyk. 3b)。クレタとスパルタの国制の類似については、アリストテレスも述べているところであるが、ヘロドトスの記事が真実ならば、スパルタ人自身がその国制のクレタとの類似性を、ヘロドトス当時すでに認識していたもの、と推測される。もっとも、スパルタとクレタとの交渉は、Hammondによると、前九世紀後半にはじまっている、というから、これが事実であれば、スパルタでも国制の類似性に気づく可能性は十分ある。Nisson はリュクルゴスの国制のデルフォイ起源説とクレタ起源説のうち、後者の方が more scientific explanationだと述べているが、これもその国制の類似性の故である。<sup>(9)</sup>

しかしながら、国制のデルフォイ起源説も同時に古くからスパルタに存在していたようである。というのは前七世紀中葉を下らないと考えられるテュルタイオスの詩の断片の中に現れるからである。この、おそらく、「エウノミア」 ("Eunomia") と呼ばれる詩の一部はプルタルコス

(Lyk. 6) に引用されており、また、これと一部重複する詩がディオドロス (VII. 12. 6) にも見られる。ディオドロスはこれがテュルタイオスの詩(の一部)であるとはいっていないが、プルタルコス、ディオドロス両者ともテュルタイオスの同一の詩の一部を引用していることは認め<sup>102</sup>てよい。ところで、プルタルコス引用の第一行でも、ディオドロス引用の第一行でも、ともに、アポロン神(ピュトの神)がスパルタ人(スパルタの町)に与えたことを明らかにしており、テュルタイオスは、スパルタの国制がデルフォイのアポロン神の託宣に由来することを示しているのである。とすれば、前七世紀中頃には、スパルタでも、国制のデルフォイ起源であることが宣伝されていたことになる。アポロン神の託宣を得た人物を、ディオドロス (VII. 12. 6) はリュクルゴスであるように語っているが、テュルタイオスの詩には与えられた人物の名は示されておらず、また、現存する彼の詩の断片のどれにもリュクルゴスという名は現れていないし、また、神託をうけたものの神格化も全く語られていない。したがって、テュルタイオスは国制の制定者については語っていないようである。しかるに、ヘロドトスはスパルタの国制を説明するにあたって、テュルタイオスの詩を引用しておらず、それを参考にした形跡すら存在しない。

以上のことから、国制のデルフォイ起源説もクレタ起源説も、ともに、スパルタに、少くとも一時期は流布したものと見なければならぬ。しかし、ヘロドトスの時代には、スパルタではクレタ起源説が有力で、デルフォイ起源説はスパルタ以外の地で流布していたように受け取れる。したがって、国制のデルフォイ起源説の発祥地はほかならぬデルフォイであり、ここにアポロン神がスパルタの国制を与えたという伝承があった、と見ることも不可能ではない。とすれば、テュルタイオスの詩もこれに由来することになる。

リュクルゴスの名は、文献的には、シモニデス以前までさかのぼることはできない。アリストテレスはオリュンピアの *ekecheiria* の規定を記した円盤の上にリュクルゴスの名を読んだ、というが、これがスパルタのリュクルゴスであったことを証するものは何も存在せず、しかも、ギリシアの伝承には、リュクルゴスなる人名を持つものが多々あるから、このリュクルゴスも別の伝承上の人物である可能性がある。シモニデスはリュクルゴスの王統との関係を述べているようであるが、国制を定めたものとはっきり表明したのは、現存の史料としてはヘロドトスが最初である。当時としては、国制の制定者の別伝もあったが、前四世紀になってから活躍したクセノフォンやエフォロスになると、すでに、彼がスパルタの立法者、国制の制定者であることは既定の事実として認められている。したがって、前五世紀から四世紀の交に、スパルタの立法者がリュクルゴスである、という伝承が一般化したと見るべきであろう。

それに対して、スパルタの王統の方は、すでにシモニデス以前から、確定しないまでも、一応系譜が成立していたと考えてよいと思う。

## 三

前節に述べたように、古代においては、前五世紀末以来、リュクルゴスの実在性について疑問を持たれたことはなく、議論の中心は彼の時代、彼の出自、彼の立法事業に集中されていた。ところが、近代に至って、一九世紀の前半に、はじめて、リュクルゴスが歴史上の人物であることに疑問をさしはさむものが現れるようになった。<sup>103</sup>一九世紀後半になると、リュクルゴスの実在を否定する意見の方が強力になったかの観を呈した。

リュクルゴスの実在が否定される一つの根拠はヘロドトスの記事である。すなわち、彼は、リュクルゴスがデルフォイのピュティアによって神と呼ばれたこと、また、スパルタには彼を祭った hieron があつたことを述べている。要するに、ヘロドトスの叙述によると、リュクルゴスは神的要素のきわめて多分にある存在とされているのである。リュクルゴスが人ではなく神だとすれば、当然、スパルタの立法者としてのリュクルゴスの存在は否定されることになるが、それではリュクルゴスとは如何なる神であろうか。Michell は、リュクルゴスが片目を敵対者によって失い、単眼になった、とするプルタルコス (Lyk. II) やパウサニアス (III. 18. 2) の記事から、彼が本来は太陽神であつた、という可能性を認めている。<sup>104</sup>また、Ed. Meyer は同名の英雄 (Lykoorgos) をアルカディアの狼神ゼウス・リュカイオス及びアルカディアの光神リュカオンと同一視し、スパルタにおけるリュクルゴス崇拜をドリス侵入以前の宗教の名残りであり、それを侵入ドリス人が取り入れたもの、と考えている。<sup>105</sup>要するに、Ed. Meyer はリュクルゴスを狼と光の神と見ているのである。ドリス侵入以前のペロポネソスには、伝承によると、リュクルゴスなる名前を持つ divine origin の英雄が何人か知られている。たとえば、アレオスの子で Triphyia のレブレオンの王となつたもの、また、ペレスまたはプロナクスの子でメネアの王となつたものである。これらの人物はいずれもゼウス信仰と深いかわりあいがある。<sup>106</sup>これらドリス侵入以前に、ゼウス信仰と結びついていたリュクルゴス崇拜が、侵入後のスパルタ人のゼウス信仰を通じて、リュクルゴス崇拜もスパルタ人の間にもたらされたということは十分考えられるところである。

また、Parke-Wormell は、スパルタでリュクルゴスが立法者として認められるようになったのは前五世紀以後で、それ以前は、英雄として

知られていて、神殿 (temple) で祀られていた、と述べているが、これはリュクルゴスが神である可能性と英雄である可能性とを認めたものである。<sup>117)</sup>

Toynbee<sup>118)</sup>はリュクルゴスについて確実なことは、紀元後二世紀にスパルタで、パウサニアスの見た、彼を祭った神殿があったこと、及び毎年彼の名誉のための供儀が行なわれることのみであるとし、しかも、それが神を祭る hieron であって、優れた人物を死後に祭るところの heiron ではなかったことに注目し、リュクルゴスが神と見なされていた、とする。次いで、Toynbee はヘロドトスに伝えられるピュティアがリュクルゴスに語った、といわれる神託をめぐる問題を論じている。すなわち、リュクルゴスはスパルタのための新しい法を求めに行ったのに、ヘロドトスによると、リュクルゴスが口を開く間もなく、ピュティアは彼が人ではなく神である、という託宣をしているに過ぎず、ヘロドトスはその後に、一説によると、とことわって、ピュティアがスパルタで現行の法を語った、といっている、と Toynbee は述べ、さらに、このピュティアの返答は、直接、改革に触れていない、とした上で、スパルタ政府がスパルタにリュクルゴスの社と祭とを創設するに当って、その社を神のための hieron にすべきか、あるいは、英雄のための heiron にすべきか迷い (その祭式が異なるので)、その決着をデルフォイに求めたとき、ピュティアの返答が彼を神とする方に傾いたので、それで満足し、リュクルゴスを神として扱うことに決定した、と推定しており、このピュティアの返答がヘロドトスの引用するピュティアの言葉に相応する、としている。また、Parke-Wormell もこの神託はリュクルゴスを神として祭るべきかどうかを訊ねてきたスパルタ人に対するピュティアの返答、と見なしている。ヘロドトスでは、神託はリュクルゴスに直接与えられている形をとっているが、Parke-Wormell はこれを比喩的な表現とし、さらに、スパルタでは heroine の priestess がその heroine の名によって呼ばれる、という独特の習慣がある点を指摘して、神託を受けに行ったというリュクルゴスは英雄リュクルゴスの神官であった可能性を示している。<sup>119)</sup>

Toynbee はリュクルゴスを人とした場合、スパルタの歴史はすべて確定していて、その挿入さるべき余地はない、としている。更に、彼が英雄として祭られているからには、それはきわめて優れた人物であった筈であり、もし彼が実在の人物ならば、歴史の確定しているポリュドロス、テオポンポス両王の治世以前の存在と見なければならぬ、という。<sup>120)</sup> たしかにアリストテレスやヘレニズム時代にリュクルゴスの年代を定めた人々も、上記二王の時代よりも以前の人としているが、一方では二王家の系譜が、すでに、ほぼ確定されているから、彼を王とするわけにはゆか

ず、王族で年若い王の後見役の地位にしている。しかし、その若い王が誰かについては様々な説があって、一致するところがなく、スパルタには、いわゆる「リュクルゴス憲法」の由来、及びその制定者（立法者）についての確定された伝承は存在しなかったことになる。これらのことを踏まえて、「Toynbeeは、要するに、現実にリュクルゴスという名前の人が、かりに、あって、すぐれた業績の記憶があったならば、彼の一片の痕跡すら残っていないのは、まことに不思議であるが、もし、彼が神であるならば、痕跡の残っていないことこそふさわしい、と述べている。<sup>22</sup>

Toynbeeは以上のように、リュクルゴスの実在を否定し、神リュクルゴスが人間リュクルゴスに転換したのは、テュルタイオス以後でヘロドトス以前である、と考えている。テュルタイオスがリュクルゴスの名を語っておらず、ヘロドトスに至って、はじめて、立法者としてのリュクルゴスが登場するのであるから、これは、当然、推察されるところである。それと同時に、「Toynbeeはスパルタの神リュクルゴスの社はテュルタイオス以前からあった、と考えているようであるが、リュクルゴスが英雄であった可能性は認めていない。

リュクルゴスの実在を否定するにしても、彼を神とするか英雄とするかの問題、また、神から英雄への転換、あるいはその逆を認めるならば、その時期の問題がおこる。ギリシアにおいて、神と英雄との区別は、先述の通り、祭られている社が *hieron* か *hêron* かによって明らかにされる。リュクルゴスについては、ヘロドトスがスパルタ人は彼の死後、彼に *hieron* を建てて、深く崇拜している、<sup>23</sup> といっているのをはじめとして、エフォロス (Strab. III. 5, C366)・プルタルコス (Lyk. 31)・パウサニアス (III. 16.6) はいずれも、ニュアンスの相違こそあれ、リュクルゴスを神と見なして、彼に対して *hieron* を献じたことを述べており、エフォロスとプルタルコスとは、リュクルゴスに、毎年、犠牲が献ぜられていることを報告している。

このように、古代の諸著述家の見解は *hieron* に統一されているようであるが、前一世紀のダマスキスのニコラオス (fr. 56) の *θύονον* *ὁς ἵποι* という言葉に対して「Tigerstedtは、リュクルゴスが英雄として崇拜されていたことを示す、<sup>24</sup> といっている。Tigerstedtはこれを手がかりとして、エフォロスはリュクルゴスが死後、英雄として社を建てられ、犠牲がささげられていると考えた、と述べている。<sup>25</sup> しかし、古代においては、これ以外にリュクルゴスを英雄としているものはなく、「Toynbeeもこの同じ fragment を註であげながらも、事実上、無視して議論を進めている。

もっとも、これらの実在否定説に対して、彼を実在の人物とし、紀元前九乃至八世紀にスパルタの諸制度を確立した、とする説、また、その時期については疑問を持ちながらも、しかるべき改革期に現れた実在の人物とする説なども存在することはいうまでもなからう。一九世紀の末に、一応実在否定説に傾きながら、今世紀にはいつてから実在説に転じ、前八世紀中葉を改革の時期ととなえた Busolt<sup>25)</sup> 以来、実在説も勢力をもち返している。第二次大戦後、いち早く、スパルタに関するユニークな研究を公表した Chrimes<sup>26)</sup>、それについて、リュクルゴス改革を論じた Hammond<sup>27)</sup> は、ともに、リュクルゴスを前九世紀に改革を行なった実在の人物としており、その後も実在説は続いている。近年の研究では、Jones, Forrest<sup>28)</sup> が、ともに、リュクルゴスを mythical figure として、実在を否定する方向に傾き、前述の如く、Toynbee がそれに続いている。

#### 四

ギリシアにおいては、英雄崇拜が盛であり、各ポリス、各部族がそれぞれ英雄を尊崇していた。その英雄は、おおむね、archegetes, ktistes といわれ、伝承上、それぞれポリスの建設者という名誉を持つものであった。ストラボン (VII, 5, C366) も archegetes は建設者 (oikistes) に与えられる称号だ、と述べている。この建設者としての名誉を持つ英雄は、戦時において、そのポリスが外敵に攻撃された際に、これを守護するために、先に立って戦うもの、と信じられていた。

ペルシア戦争の際に、マラトンではテセウス (Plut. Th. 35) とエケトロス (エケトライオス) (Paus. I. 32. 5) が、デルフォイではピュラコスとアウトノオス (Hdt. VIII. 38) が出現して、ペルシア軍を追った、というし、更に、サラミスの海戦ではアイアコス一族 (Hdt. VIII. 64: Plut. Temist. 15) 、またキュクレウス (Plut. Th. 10; Plut. Solon 9; Paus. I. 36. 1) などが勧請されて来援し、プラタイアイの戦でも、この町の七人の oikistes に援助を要請している (Plut. Aristides II) 。このうち、マラトンには建國英雄としてマラトンというものがあつたが、ペルシア戦争当時には、すでに、マラトンはアテナイに合併されている。ただ、テセウスは古くからアテナイと関係浅からぬ英雄であるが、エケトロスの方は、マラトンの戦の時に、突如として、姿を現し、戦後姿を消しており、その後、神託によって、はじめて、英雄として祭られたものである。したがって、エケトロスは本来、マラトン付近の土着の英雄であつたものが、何らかの事情で、その崇拜が廃れ、戦争によって、ふたたび、盛になつたのではないかと推察される。デルフォイの二人は、明らかに、土着の英雄であり、サラミス海戦の際もサラミス島とアイ

リュクルゴス再考



ギナ島に土着のものである。この中で、注目すべきものはキュクレウス (Kychreus) である。ブルタルコスはその「ソロン伝」の中で、キュクレウスをサラミス島の英雄としているが、同じブルタルコスが「テセウス伝」では、アテナイ人はキュクレウスを神として尊崇している、と書いており、更に、パウサニアスでは、(アテナイでは) キュクレウスに対して heron を献じている、としながら、一方では、彼を英雄として扱っている。これはキュクレウスが神とも英雄ともいわれていたことを物語るもので、英雄の神格化とも見ることができよう。

以上のように、各ポリス、各地方には建国にかかわる英雄があり、それが外敵の侵略をうけたときに、防禦に力をつくしてくれ、と考えられていた。いわば建国英雄は、同時に、護国英雄なのである。しかるに、スパルタについては、建国英雄というものが全く伝えられていない。たしかに、スパルタはドリス人によって、征服された国家であり、伝承はアリストデモス (Aristodemos)、または、その双生児 (エウリュステネスとプロクレス) が侵入する際の指導者というが、これらの人物が英雄として祭られていたという記事は見当らない。

一方、スパルタでは代々の王が死後、英雄として崇拜された、といわれており、また、きわだった業績のあった人物を、死後英雄として祭る場合はしばしばある。代表的な例としては、キロンがある。彼はギリシア七賢人の一人であり (Platon, Protag. 343)、前五五六年頃にエフォロスに就任し (Diogenes Laertios. I 68-73)、その権限を拡大した、といわれる人物である。パウサニアス (III. 16.4) によると、このキロンが死後、heron を献ぜられており、パウサニアスの時代にもそれは存在している。前五世紀頃から立派な人物を称讃する場合に theios aner (θεῖος ἀνὴρ) という言葉が使用されるようになった。theios aner とは「神のような人」「神的な人」と訳し得ようが、プラトン (Men. 99d) によると、この言葉はスパルタ人によって好んで用いられた、という<sup>80)</sup>。とすれば、七賢人の一人に数えられるキロンは、まさしく theios aner にほかならない。生前、theios aner と称讃されるほどの人物が死後、英雄として扱われるのではないか、と思われる。同様に、国制の制定者や立法者も theios aner である筈であり、死後、英雄として崇拜される筈である。ところが、伝承上、リュクルゴスは立法者であるが、神として祭られた、という。しかし、そのリュクルゴスには英雄的な面がある。ブルタルコス (Lyk. 31) はリュクルゴスが外国で死んで、そののち、遺骸が故国にもたらされて埋葬された、とする説を紹介しているが、英雄崇拜は、その遺骨の葬られた墓にともなうのが通例である。また、ヘロドトス (I. 65) の伝える神託で、ピュティアは、リュクルゴスを神と呼ぶべきか人と呼ぶべきか迷ったのち、神であるとの決断を下している。ピュティアが神か人か迷ったそのことは、リュクルゴスが、まさに、「神的な人」(theios aner) であり、英雄にほかならなかったことを意味

しているように思われる。更に、毎年、犠牲がささげられることも、英雄にとって、不似合なことではない。このように、リュクルゴスには、英雄と共通する面が多い。<sup>61)</sup>

Toynbeeはスパルタの住民を、スパルティアタイが侵入ドリス人、ヘロットが先住民族の後裔という如く、截然と分類することは不可能であり、ペリオイコイを含めて、どの身分のうちにも複雑な要素があることを主張し、先住民族の後裔の中にも、スパルタ市民権を与えられたものもあることを示唆している。さらに、アルゴスやメッセニアの例をあげながら、スパルタの二王家も、侵入ドリス人系のものではなく、その土地生え抜きの、いわば地方的な起源を持つ可能性さえ認めている。<sup>62)</sup> もし、この推察が当たっていれば、リュクルゴスもドリス人侵入以前の時代に、神または英雄として崇拜されていた可能性が高まっていく。それが侵入者を主体とする国家にとり入れられたとき、最古の神格という形をとるが、ときには *fade* やれ、*depotentiate* されて、スパルタの守護神ゼウスとアテナとの下位に立つ英雄リュクルゴスとされ、それはその古さからいって、建国英雄と見なされるようになった。ひとたび、建国にかかわる英雄とされれば、その国家の基本的な方針、国制を定めたもの、という伝承を生む。したがって、前七世紀末から六世紀前半にかけて、徐々に、軍国主義的国家体制へ転換してゆく際に、時の立法者達によって、その転換がすべてリュクルゴスの制定した国制に沿うもの、と宣伝された可能性は十分にある。ヘロットス当時には、彼がクレタの法制をとり入れて、現在の法制と生活様式すべてをつくったので、すなわち、*theios aner* だったので、死んだのちに、神として崇められたことになっているが、これは、当然、英雄となるべき筈である。おそらく、ヘロットス当時、すでに、リュクルゴスが *heron* 持っていたため、また、リュクルゴスが立法者であるとの伝承を持っていたために、以上のような記述になったもの、と考えられる。ヘロットスの伝える神託によって、リュクルゴスは神格化されるが、これは各地で立法者が現実に出現した前七世紀後半に、スパルタでは、諸種の改革がリュクルゴスの意向に沿うものとするために、立法者としての、その権威を高めるべく、行なわれたものである。<sup>64)</sup> そして、それよりのちに、クレタの国制との類似に関心が向けられ、リュクルゴスはクレタの国制にならって、国制を制定した実在の *theios aner* であった、とされたが、*heron* を、すでに彼が持っていたため、*theios aner* が死後に英雄となるという定石を破って、実在の人物が死後、神になった、とされた。その後、国制のデルフォイ起源と人間リュクルゴスの死後における神化という二つの要素が定式化され、エフォロス以後は、その形で、うけつがれて行く。ヘレニズム時代になると、神格化が盛となり、人間の英雄化、英雄の神化がまれではなくなってゆくので、エフォロス以後では、人間リュクルゴスが死後に

神として祭られることは、抵抗なく受け入れられて行く。かくて、ヘレニズム時代に、リュクルゴスは人間と考えられるようになり、彼にまつわる立法伝説が形成されて行く。この伝説の形成過程において、その当時のスパルタ社会の情勢が作用して、その立法の内容は、次第に、ヘレニズム時代のスパルタから見て、理想的なものへと発展して行くのである。

〔註〕

- (1) 拙稿「Lykurgos 改革と Rhetra をめぐって—A.J. Toynbee の近業に関連して—」(『大手前女子大学論集』五、一九七二年、五四—六三頁)。
- (2) 拙稿「スパルタの制度とリュクルゴス伝説—立法伝説の形成とその時期—」(『史林』四四—四、一九六一年、四九—七四頁)。
- (3) E.N. Tigerstedt, *The Legend of Sparta in Classical Antiquity*, Vol. I. (Stockholm Studies in History of Literature 9), 1965, 210-11
- (4) リュクルゴスがスパルタの二王家のうちいずれに属するかは著述家によって説を異にするが、本稿ではこの問題には深く立ち入らない。
- (5) Paus. III. 2. 3-4 も両説を併記するが、ここでは、レオボテスから三代目のアゲシラオスの治世にリュクルゴスが法を定めたとしている。
- (6) 三部落のことは Hylleis は Harakles の子 Hyllos を名祖とする。
- (7) 国制の制定者としてのリュクルゴスの実在を信ずる立場の人々はツキュディデスのこの記事を手がかりに、前九世紀後半—八世紀前半が彼の時代と考えている。
- (8) クラクレイダイの時代とはドリリス人侵入以後の時代を指すものと思われる。
- (9) Pol II. 5. 1269b 以下随所に両者の国制の異同を論じている。
- (10) N.G.L. Hammond, *The Lycourgean Reform at Sparta*. (JHS. LXX, 1950, 42-64) 62-64.
- (11) M. P. Nilsson, *A History of Greek Religion*, 2nd. Ed., 1949, 190.
- (12) 清永昭次「第一次メッセニア戦争期のスパルタ」(秀村・三浦・太田編『古典古代の社会と思想』所収、一九六九、三七—七〇頁)五三頁参照。
- (13) G. Busolt-H. Swoboda, *Griechische Staatskunde*, 1926, 650.
- (14) H. Michell, *Sparta*, 1952, 20.
- (15) Ed. Meyer, *Lykurgos von Sparta*. ("Forschungen zur alten Geschichte I", 1892, 211-286) 270-83.
- (16) この点については前掲『史林』四四—四所収拙稿、六五—六六頁参照。
- (17) H.W. Parke & D.F.W. Wormell, *the Delphic Oracle*, Vol. 1, 1956, 91-93.
- (18) 以下 Toynbee の所説を Toynbee, op. cit., 275-77.
- (19) Parke & Wormell, op. cit., 91.
- (20) Toynbee, op. cit., 277.
- (21) W. den Boer, *Laconian Studies*, 1954, 8-9.

- (22) Toynbee, op. cit., 278-79.
- (23) Tigerstedt, op. cit., 497n. なお Toynbee, op. cit., 276n 参照。
- (24) Tigerstedt, op. cit., 211.
- (25) Busolt, op. cit., 651-52.
- (26) K.M.T. Chrimes, *Ancient Sparta*, 1947, 305-347.
- (27) Hammond, op. cit., 42-64.
- (28) A.H.M. Jones, *Sparta*, 1967, 5-7.
- (29) W.G. Forrest, *A History of Sparta 950-192 B.C.*, 1968, 40.
- (30) theios aner 神王 Menon 99d のほか LG, 626c, Arist. E.N. 1145a にもスパルタ人が人を称賛するときに使う言葉であることが示されている。
- (31) 先に述べたサラシスのキュクレウスのように、神か英雄かの区別の判然とせぬものがあることも合わせて考えるべきである。
- (32) Toynbee, op. cit., 163-64 & 167.
- (33) Dioskuroi の信仰も先住民から取り入れられたものであるが、二王家が精神的にはこの双生児と深い関係がある。なお Hdt. V. 75 参照。
- (34) これが事実ならば、その神格化はキロンによって意図されたものという可能性はある。スパルタでは現実の立法者よりも、基本法を作ったとされる英雄が尊崇されるようになっていたのである。
- (35) 彼が実在と認められるようになってはじめて王統との結びつきが考えられるようになる。
- (36) Busolt, op. cit., 650-51.